

真実はいつも新鮮な衝撃!

短かくとも美しく燃えつきた
ひとつの命。



2200万人に1人という病気によってわずか16才で生涯を閉じた
ロッキー・デニス少年の本当の物語。

マスク

MASK

シエール/サム・エリオット/エリック・ストルツ

エステル・ゲティ/リチャード・ダイサート/ローラ・ダーン

監督 ピーター・ボクダノビッチ

製作 マーチン・スターガー

脚本 アンナ・ハミルトン・フェラン

◆ロッキー・デニスの実話に基く◆

撮影 ラズロ・コバックス

カラー作品
ユニヴァーサル映画
CIC配給

●スタッフ

監督……………ピーター・ボグダノビッチ
 製作……………マーチン・スターガー
 脚本……………アンナ・ハミルトン・フェラン
 (ロッキー・デニスの実話に基く)
 共同製作……………ハワード・アルストン
 製作補……………ジョージ・モーホゲン
 "……………ペギー・ロバートソン
 撮影……………ラズロ・コバックス

●キャスト

ラストィ・デニス……………シェール
 ガー……………サム・エリオット
 ロッキー・デニス……………エリック・ストルツ
 イブリン……………エステル・ゲティ
 エーブ……………リチャード・ダイサート
 ダイアナ……………ローラ・ダーン
 ベーブ……………ミコール・マーキュリオ
 レッド……………ハリー・ケリー・ジュニア

ぶつているように見えるのです。でもそれが彼のありのままの「顔」なのでした。
 実在の人間をモデルにしたこの映画「マスク」は非常に特殊な人生を克服した少年ロッキー・デニスの感動の物語です。
 ロッキーの美しくも短かい人生に登場した人々は、そんな彼をまったく特別扱いしませんでした。まったく普通の少年と接することく振舞ったのです。ごくごく自然に……
 母親は世の中の慣習にとらわれない人生を送るタフなバイク・レディでした。ドラッグと男に明け暮れる日々でした。そんな母親をロッキーがさとするのです。体によくはないよと。自分自身の体の方がよほど危険な状態

マスク MASK



ユニヴァーサル映画 CIC配給



1964年—1980年。わずか16才で生涯を閉じたロッキー・デニス少年のこれは本当の物語。
 ロッキー少年の家は南カリフォルニアの郊外にありました。彼の部屋にはビートルズやブルース・スプリングスティーンのパスターやハレー・ダビッドソンの写真、それにヨーロップ全土の地図や彼が愛したブルックリン時代のドジャースの名選手たちのプロマイドが壁中に貼られていました。
 映画は15才のロッキーがシニア・ハイスクールを卒業する間近な日から始まります。カメラが屋外から彼の部屋をとらえます。カセット・ラジオから響き渡るロックンロールのリズムに体を合わせTシャツを着て、鏡に写る自分の姿を点検している様子は、典型的なアメリカン・ティーンエイジャーの姿です。でも振り向いたその顔は、私達がかつて見たこともない顔なのです。彼の目は、普通の2倍もある顔の上で極端に広がっています。鼻には鼻柱がありません。一見すると奇妙な「マスク」をか

に近づいていくのに。母親の周囲にいる男たちもまたバイク・グループです。彼らもまたアウトサイダーの身上ですが、ロッキーを心から愛し、彼の友だちであり彼の父親でもあるのでした。シニア・ハイスクールの卒業の日、優等生として壇上に呼ばれ賞状を貰うロッキーは、そんな彼らの希望であり誇りでした。自分達がなしえなかった夢をロッキーに見出すことく式に参列した彼は狂喜乱舞するのです。口の不自由なメンバーの中の一人の大男が懸命にロッキーにしゃべりかけます。「僕はとつてもうれい」と。たったこれだけの言葉を表現するのにも大男にとつては大変な努力が必要だったので。ましてここ数年間、人に向かって言葉なんか発したこともなかった男だったのに。
 ある日サマーキャンプに参加したロッキーは、そこで盲目の美少女と出逢います。そして愛が芽生えます。ロッキーの初恋です。お互いのハンディキャップを乗り越えてロッキーと少女は素晴らしく純粋な愛の世界を築き上げるのです。
 ロッキーは普通なら回りの人々から同情され庇護されて、分知り顔の大人から特殊な環境下での生活を強いられたかもしれない。ロッキーの周囲の人々はそうしませんでした。そうしなかつた代りに、彼らは逆にロッキーから愛と勇気を与えられたのです。ロッキーは16才で短かい生涯を閉じました。
 監督は「ペーパームーン」や「ニッケル・オデオン」等でハリウッドの若手監督を代表する名匠ピーター・ボグダノビッチ。脚本はこれが処女作で、自分自身が遺伝学カウンセリングを職業とする経験を持つ女流作家アンナ・ハミルトン・フェラン。実際のロッキーと出逢った体験を下に脚本を書き下しました。
 主演はロッキー・デニス少年にTV界で活躍しているエリック・ストルツ。最初から最後までメーキャップしたままの出演ですが、映画では初の大役でした。母親役のシェールは、かつて「ソニーとシェール」の名前で大活躍した音楽界のスーパースター。女優に転向してわずか3年しかたちませんが、ブロードウェイでたちまち頭角を現し、映画でもゴールデン・グローブ賞、アカデミー賞の助演女優賞にそれぞれ既にノミネートされるほどの実力を見せています。
 なお本作品は、第一回東京国際映画祭参加作品です。